応用言語学

シャルル・ブートン

滑川明彦
会津　洋
滝沢隆幸
共訳

白水社

訳者略歴
滑川明彦（なめかわ　あきひこ）
東京外語卒，外務省通訳養成所（英語）を経て，渉外通訳．
1962年東京教育大学大学院博士課程修了．
フランス語・フランス文学，多文化間コミュニケーション専攻．
日本大学文理学部教授．
主要著書「絵で見るフランス語入門」（共著）
「和仏対照テーム天声人語」（共著）
「旅と生活のフランス語」
「あなたにもできるフランス語通訳ガイド」
主要訳書　マトレ「フランス基本語辞典」（共訳編）
テリエ「英文法」（共訳）
ブランシャール「フランス系カナダ」
会津　洋（あいづ　よう）
1931年生．
1956年東京都立大学人文学部大学院修士課程修了．
フランス言語学・フランス語教育法専攻．
早稲田大学語学教育研究所教授．
主要著書「和仏対照テーム天声人語」（共著）
「アンヌの日本旅行」（共著）
「絵で見るフランス語入門」（共著）
滝沢隆幸（たきざわ　たかゆき）
1933年生．
1963年東京教育大学大学院博士課程修了．
フランス言語学専攻．
名古屋大学総合言語センター教授．
主要著書「フランス語発音入門」
「生きたフランス語の単語帳」（共著）
主要訳書　ペロ「言語学」（共訳）
マザレラ「フランス詩法――リズムと構造――」（共訳）

応用言語学

1988年2月20日印刷
1988年2月25日発行

訳者　滑川明彦
©　会津　洋
滝沢隆幸
発行者　高橋　孝
印刷者　河内工房
発行所　101 東京都千代田区神田小川町3の24
電話 03-291-7811(営業部), 7821(編集部)
株式会社白水社

振替　東京9-33228
加瀬製本

ISBN4-560-05688-9

文庫クセ

Que sais-je?

応用言語学

江苏工业学院图书馆
藏书章

シャルル・ブトン
滑川明彦
佐藤洋
滝沢幸
北澤

東京 白水社 神田

Charles Bouton: LA LINGUISTIQUE APPLIQUÉE
(Collection QUE SAIS-JE? N° 1755)
Original Copyright by Presses Universitaires de France
Copyright in Japan by Hakusuisha

日本の読者に

本書は《文庫 クセジュ》の一冊である．1941年フランスに発足したこの文庫は，現在五百冊を刊行しており，完成のあかつきには千冊に達する予定である．《文庫 クセジュ》は，知能に基礎的陶冶をくわえるための現代知識の焦点たらしめようという刊行者の意図によってはじめられた遠大な仕事である．

このような仕事をなぜフランスではじめるようになったのであろうか．その第一の理由は，フランスが百科全書の精神，いいかえればあらゆる人知を系統的に解明することをこころざす知的技術の誕生の地だからである．ディドロやダランベールの手になる『大百科全書』が刊行されはじめたのは1751年パリにおいてであった．この偉業は神学上の束縛から人間精神を解放するのにあずかって大きな力があったし，また1789年のフランス大革命のもっとも積極的な素因の一つともなったのであった．

第二に，フランス人の知性はその本質的な傾向から，普遍と綜合，つまりあらゆる百科全書が主眼とする二つのことがらを目ざすものだからである．

第三に，フランス人は，ひとびとのためにつくす最上の方法はその知性をたかめ文化財をゆたかにすることであると確信しているからである．この二つの目的にそうためには，慎重な構想のもとに細心の注意をもって作られた書籍で，きわめて教育的価値の高いしかもきわめて価格の安いものを，できるだけ豊富に提供するよりほかに道はない．

こういうわけで《文庫 クセジュ》がフランスにおいて熱狂的な歓迎をうけ，また知識欲にもえる若い世代の人たちによって学業のおぎないとしてとりあげられているのも，当然のことといわなければならない．

しかし，《文庫 クセジュ》の生みの親たちは，自分たちのはじめた仕事がフランスおよびフランス語諸国以外でその真価を認められ受けいれられようとは夢にも考えなかった．ところが事実はその逆であった．この文庫の最初の一冊を世に問うてから十年，そのあいだに世界の七か国語をとおして，このささやかながら貴重な冊子は地球のすみずみまで行きわたるようになったのである．

このたび，日本のような古い伝統につちかわれた文化国がこのフランス精神の発露を受けいれてくれることになったのを，われわれはとくにうれしく思っている．人間精神のもっとも高邁なはたらきによびかけるこの文庫の使命には，野望も私心もさらにない．日本の読者がみなこの使命を理解し，それが千年の歴史に輝く二大文化の精神的接触に寄与することを願ってやまない．

1951年10月

コレクション《クセジュ》監修者
ポール・アングールヴァン

目　　次

序　論…… 5
第1部　言（パロール）の領域における応用言語学 …… 7
第1章　言語の発達…… 7
第2章　言語の病理学的諸相……29
第2部　相互伝達の領域における応用言語学――
　　話（ディスクール）の社会的側面 ……49
第1章　二言語併用……49
第2章　翻訳……64
第3部　教育における応用言語学――
　　言語の教育的側面 ……81
第1章　母語教育……81
第2章　学校における外国語の習得……96

訳者あとがき…… 125
参考書目…… 128
索　引…… 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

序論　応用言語学とはなにか

すべての科学には，その技術水準（レベル）に応じたさまざまな実際的応用面が存在する．数学や物理学においては，化学におけると同様に，人間が物に対して働きかけるとき，「知恵のあるヒト」homo sapiens としての人間が経験と考察の結果みつけた一般法則にはじまって，「物をつくるヒト」homo faber としての人間に課せられる具体的な諸問題の解決の場で，これら諸科学の応用がなされるのである．

橋をつくる技術者は，物理学や数学によって確立された法則を応用するし，医学においても同様に，臨床医は生物学者や化学者によって証明された資料を拠りどころにする．

このような観点からみると，応用言語学の基礎には純粋に理論的な一般言語学があり，その依存関係は，技術者や医師が用いる技術が，彼らの行動の土台となる基礎科学の資料に依存しているのと同様である．

しかし彼らが独自の経験をすれば，一種の遡及効果により，彼らの支えとなっている基礎科学の資料が制御され，あるいは無効にされて，むしろ基礎科学の理論的発展に貢献するのである．

同様にして，いま彼らが解決しようとする現実の諸問題に理論言語学の資料を応用すれば，それは理論言語学の認識論上の基盤をいっそう強固にし，それを一新するに違いない．しかしながら，われわれのみるかぎり，理論科学としての言語学とその実際的応用面とは，現在まだ釣り合いがとれているとは思われない．

実際，もしも人間の存在を本質的に「ことばを話すヒト」homo loquens としてとらえる言語学が，そのような意味において人間のあらゆる科学の接点であるとするなら，言語学のもたらす成果をこ

の「ことばを話すヒト」に特有のさまざまな問題に応用することによって示されるのは，この科学の実用面における歩みが多くの場合，まだ不確かなものにすぎないという事実である．

それゆえ，応用言語学のような学問分野においては，ややもすれば網羅的になろうとして研究対象を広げることになる場合もあるが，本書ではあえてそれを避け，言語学がいままで応用されてきた特殊な研究領域に限定することとした．

本書の再版についてはカタニア大学〔イタリア，シシリア島〕の言語学研究所 Istituto di Glottologia de l'Université de Catane のサルヴァトーレ・C．スグロイ師 Pr Salvatore C. Sgroi の初版の誤植個所に対してなされた示唆に多くを負っている．ここに満腔の感謝の意を表するものである．

第1部　言（パロール）の領域における応用言語学

第1章　言語の発達

I　過去の遺産

人間の社会に言語があらわれ，子どもの口から最初の言葉が発せられるという現象は，古代から先現代 époque précontemporaine に至る時代にあって，しばしば強く結びついていると思われる2つのテーマを言語学上の考察に与えた．

ヘロドトスによって語られたエジプト王プサメティコスに関する逸話は，この主題にとって二重に意味深いものがある(1).

---

(1) ヘロドトス Hérodote（「古代探究」第2巻，p.142，《プレイヤード》版叢書『ギリシア史家』*Historiens grecs,* coll. 《Pléiade》, Paris, Gallimard, 1964に収録）は，地上最古の民族とは何であるかを知りたいと思ったエジプト王プサメティコス Psammétique が，いかにしてこの問題を解決したかを物語っている．プサメティコス王は，生まれたばかりの2人の赤ん坊をひとりの羊飼いにあずけて，人里離れた小屋で育てさせたが，この子たちの前ではだれもひとこともしゃべらないように命じておいた．羊飼いは毎日，子どもたちにたっぷりと乳を飲ませてくれる山羊を連れだしたり，子どもたちに必要なその他の面倒をすべてみてやらなければならなかった．2年の月日が過ぎたある日のこと，子どもたちが羊飼いの方へと寄ってゆき，ひとこと「ベコス」bécos と言ったのである．そこで子どもたちは王のもとに連れていかれたが，王は学者たちを召集して，「ベコス」とはいかなる種族の言葉で，どんな意味をあらわすかを申すよう命じた．学者たちのひとりが立って，それはフリジア人の間でパンを意味する言葉ですと答えた．エジプト人は，このような証拠をみせられては一言もなく，フリジア人が自分たちよりも古い民族であることを認めたという．

歴史の中には，このほかにも同様の実験を試みたことで知られる国王が

この説話から予想できることの第1は，人類の発展途上におけるある一時期に人類全体にあらわれたひとつの過程が，個人のレベルに置き換えれば，1人ひとりの子どもにそのままの形で再現されるということである．

第2に，この説話が示しているのは，この時代の人びとにとって，子どもに言語が生ずるのは，子どものさまざまな能力の内的成長の結果だとみなされ，その成長は他者の存在によって刺激されることはあっても，他者と接触できる言語的環境には決して左右されるものではないと思われていたことである．

過去の歴史には，生後5年から10年にわたって人間社会との接触を完全に絶たれ，そのあと正常な生活環境に復帰させられても，その社会の言語を申し分なく修得（マスター）することに事実上成功しなかった子どもたちの例が数多く残っている．前世紀の初め頃イタール医師によって保護された狼少年ヴィクトールの場合は，トリュフォーが映画化したためにいっそう有名になった〔1969年制作『野性の少年』〕(1)．

伝説にせよ現実のものにせよ，これら過去の画期的な日印 repères を通して，われわれは子どもの言語発達に関する問題提起の基本的命題を次のようにとらえることができる．すなわち，

1. 言語の個体発生 ontogénie はどの程度まで系統発生 philogénie を繰り返すか．

いるが，そのひとりはスコットランド王ジェームズ4世（1473-1513），もうひとりはさらに2世紀前のホーエンシュタウフェン王フレデリック2世である．

(1) 最近の研究例ではジェニーの場合がある．これに関してはフロムキン V. FROMKIN 他による論文，すなわち『脳と言語』*Brain and Language* 誌の1974年，第I巻1号，pp. 81-108所収の「ジェニーの言語発達――決定的時期以後の言語習得の一例」The Development of Language in Genie: a Case of Language Acquisition Beyond the Critical Period を参照のこと．副題が示すごとく，執筆者たちは，ある発達段階を過ぎた後の言語習得不能を主張する定説に対して含みのある意見を提出している．

2. 言語の発達が遺伝子型現象 phénomènes génotypiques の作用に基づいているとして，言語は生得的なものとみなされるべきだろうか．

3. それとも，言語は表現型発展過程 processus phénotypique に支配される環境の結果であると，つまり一種の社会的事実だとみなすべきだろうか．

幼児言語に関する思索がずっと以前から行われてきたとすれば，子どもの言語というものが大人の言語に与えられているのとは別個の，独立した地位をもつものであることを承認するまでは，これに関して建設的な考察はできなかったことを十分に認識しなければならない．しかるに，このような研究態度は，幼児教育の理論家たちが子どもを大人の縮尺版とは全くの別物だと考え始めたとき，ようやく可能になったのである．

II 最初の体系的観察

ドイツ人の学者D. ティーデマンが息子の言語発達に関する研究を発表したのは，実に18世紀の末，1782年のことであった．その中で彼は，幼児の談話（ディスクール） discours において示される運動感覚と空間感覚を，さまざまな原始民族が示す共通の感覚にたとえている．

彼の著作にも，やはり個体発生は系統発生を繰り返すという理論の基本となる前述のテーマのひびきが聞こえるが，彼が経験と言語との間に存在すると予測する関係をみると，すでにピアジェ的思考の前兆がうかがえるのである．

今世紀の30年代になると，A. グレゴワールが自分の子どもたちの言語発達だけをとりあげたきわめて詳細な単一主題的研究にとりくみ，これを40年代の中頃まで継続した．

この種の研究において，子どもの言語が一貫して比較されているのは親の言語に対してではなく，親の言語が明示している一定不変の体系，すなわち話し手の言語が進化してゆくすべての段階を通じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

て，常に目標としなければならないひとつの規範としての文法が命ずるさまざまな指示項目に対してなのである．

このように，言語の習得は正しい言表（エノンセ） énoncés を生みださせる文法上の諸規則を修得（マスター）するための漸進的な学習アプローチと考えられるが，このような学習は，周囲からの，そしてとりわけ両親からのたゆみない働きかけによって，初めて可能となるのである［両親は，子どもにとって言語上の健康管理者であるとともに，正しい慣用の見張り役でもある］．

したがって，言語の習得過程はひとつの社会的事実だとみなされ，言語の発達においては表現型の側面が優勢であるという考えが，ことさらに真剣な論争を呼ぶこともなく受け入れられている．

これらの研究に含まれている言語学的成果には，特に音声学の領域において，概念規定の正確さをあまり評価するわけにいかないという難点はあるものの，これらは今日なお非常に有益な資料となっている．言語学者が一個の観察者として，客観的に物事をみつめる役割を厳密に守ろうとするこのような視点にたつかぎり，それが科学的な態度であることは説明を要しないであろう(1)．

III　心理学者たちの貢献

心理学者たちは，できるかぎり厳密な科学的観察の精神に留意して幼児言語の研究に専念した最初の人びととなった．結局，40年代に至り，マウラーがでて音韻の習得に関するひとつの理論を発展させるのだが，その理論は今なお多くの心理学者や音声病学専門医たちから最も信頼できるものと考えられている．しかるに，当時の心

---

(1)　このように厳格な客観的態度を物語る実例としては，レオポルド W. F. LEOPOLD の論文『二言語併用児童の言語発達――一言語学者の記録』*Speech Development of a Bilingual Child: a Linguist's Record* がある．これは Chicago（イリノイ州），Evanston，ノースウェスタン大学出版部 Northwestern UP，1939-1949 の 4 巻本に所収．

理学には，観察された諸事実を単純に要約して，一般的なひとつの心理学理論に帰着させてしまおうとする一貫した傾向がみられたのである．例えば，行動主義，ゲシュタルト心理学，条件反射などがそれであるが，そのため，これらの心理学理論によって提案された解釈法は，必ずしも主張するほど客観的なものになってはいない．

これらの理論によると，学習のプロセスはすべて《環境》によって決定するとみなされ，それらは環境がもたらしたひとつの《結果》にすぎないという説明が決まり文句になっていたのである．したがって，表現型の側面がふたたび脚光を浴びたことになる．

このような風潮をくつがえそうと努力した最初の人物，しかも長期にわたって唯一の人とされていたのは J．ピアジェであった．彼は自分の研究方法をひとつに集積し，その結論として，人間行為に関する新しい科学的アプローチを導きだした．それがすなわち発生論的認識論 épistémologie génétique であり，彼が子どもの言語発達を検討したのは，この研究分野から得た資料を手がかりとしているのである．ピアジェによれば，芽生えようとする言語行動の最初の徴候があらわれるずっと以前から，感覚・運動面 sensorimoteurs および認識面 cognitifs における子どものあらゆる獲得物が，言語の出現を準備し，それを容易にしているという．こうして，一連の事実が初めて明らかにされた．すなわち，言語の発達はひとつの孤立した発展過程ではなく，子どもの全体的発達の一部分，それも単なる一部分にすぎないということ，そしてこの部分は，子どもの発達全体に対して緊密な従属関係にあるということであった．

このような発達の各段階が，実際にひとつの進歩をもたらす決め手となり，言語はその進歩の恩恵を受けて発達するのであり，そのような進歩なくして言語の構築はありえないであろう．

そこでまず考えられることは，遊びの場面などで叫び声をあげれば，それが何かを象徴する一種の呼びかけとしてとらえられ（例えば，子どもが小石で遊びはじめるとき，それを小さな車とみなして色々な声をだす），このことから生ずる象徴機能のいわば最初の目

覚めが，まず第一に言語の習得にとって不可欠の条件となるのであるが，そのような象徴機能を代表する最も洗練された形式こそ言語にほかならないのである．同様に，初めは具体的な行為の次元で獲得されたのち，ひきつづいて抽象的な精神活動の面へと適用される保存と変形の概念が発見されれば，それによって言語構造の理解と運用が促進されるのであり，このような概念の組織的な開発こそ，まさに，言語構造がもつ文法上の経済〔的調和〕性 économie grammaticale と意味性 sémantisme とを築くための土台となるのである．一例を挙げれば，比較ないし同等の表現，つまり，ある意味で時間的および空間的の諸関係をあらわすさまざまな表現法がそれである．

言語の発達が，それに先行する感覚・運動面および認識面での獲得物に依存するという，このような従属関係は一体何を意味しているのか．このような獲得自体が，そもそも発生論的発達に強く支配されているのだから，ピアジェの場合，言語の発達途上で表現型要因の作用が遺伝子型要因の作用に事実上従属するということになるのは，容易に推測できることである．

子どもの言語に関する現代の研究に貢献したピアジェの考察の独創性は，まさにこの点にあり，彼の理論が，言語を純粋に環境作用の産物であると主張してやまなかった環境主義的，社会学的学説とはっきり対立するのも，このような観点にほかならない．

Ⅳ　言語学者の役割

言語学者は心理学者と歩みを異にした．

体系的な実験と考慮を経てさまざまな理論的概念を集大成することにより，きわめて内容の充実した言語学上の一考察がなされた結果，40年代と50年代の構造主義者たちは，この考察をもとにすれば子どもの言語習得に関するひとつの理論を構築することができるのではないかという期待をいだいた．

その研究は構造主義自身の歩みから生まれた学問分野である音韻論に属するが，構造主義は，まさにこの領域ですでにその方法論の力量を最大限に発揮していたのである．

この分野では最初であり，かつまた最も首尾一貫していると評価される理論的仮説を立てたのは，ローマン・ヤコブソンであった．R．ヤコブソンによれば，子どもの音韻上の能力が発達し始めるのは，生後10カ月から12カ月の間，すなわち，ひとつひとつの音声がどんな順序で発音されているかを間違いなくとらえられるようになったとはっきり認められる時期以後であるという．したがって，R．ヤコブソンにとっては，言語以前 prélinguistique の時代にみられるレロレロ音 lallation や片言しゃべり babillage のような先行現象は，その後に始まる音韻体系の発達には全く影響を及ぼさないと考えられるのである．

さて，やはりR．ヤコブソンの研究によると，注意深く観察すれば，子どもが理解できるこの発音順序にはそれを厳密に規制する法則があり，このような法則性はどの国の言語にとっても普遍的に有効であることが確かめられるという．この驚くべき画一性については，さまざまな国籍の研究者たちがすでに注目していたことであるが，しかしヤコブソンの場合は，子どもが示す音韻上の発達を一種の初歩的共通図式 schéma initial commun に基づいて築いた理論であるから，言語病理学の経験からみても，その図式のいわば複製がまるで鏡のように写しだされることになる．例えば，音声を失調した症例では，最も早く失われたのは一番あとで獲得された音であった．たしかに子ども時代に特有の一種の発音法が存在しているが，これは子どもの感覚・運動面が進化してゆく過程では，大人の言語が要求するものには遠く及ばない初歩的な段階においてのみ許容されるものである．しかるに子どもが自分の周囲で用いられている言語のモデルに合致した音韻体系を徐々に形成してゆくのは，とりもなおさずこの種の初期的発音法が基礎になっているというのである．

ところで，構造主義者のすべてがヤコブソンの理論に賛成しているわけではない．例えば，オルムステッドは彼の理論をしりぞけ，マウラーの理論から直接に演繹されるひとつの理論を採用し，また大人の音韻体系に関連したB.ブロックのいくつかの仮説を提案しているからである．それゆえ，これはまさしく環境主義的学説への回帰であるといわざるをえないが，全体として行動主義的なマウラーの概念に比べれば，ニュアンスの違いがいくらかみられるのである．すなわち，オルムステッドによれば，音韻習得の順序は音素を生みだす頻度と，それらの音素を知覚する場合の容易さによって決まるのだという．

こうした状況のもとで，最近ブレイン・モスコヴィッツが応用しかつ発展させたのは，やはりヤコブソン理論であり，その一般的な枠組の範囲を越えるものとはなっていない(1)．

B.モスコヴィッツは，音韻の発達というものを，いくつかの音声単位とその結合の仕方を決定する法則を習得することだと考える．この見方は，全体としては生成音韻論 phonologie générative の現在の見解に合致するものである．次に，子どもはよりいっそう安定した不動の音声単位を連続的に発見してゆく方向に進むと仮定するが，彼女の場合は，このような発見はレロレロ音の時代から始まるとみるから，この時期は子どもの言語発達全体の脈絡から切り離されてはいない．彼女の理論がヤコブソンの理論と最も対立する

---

(1) この部分については，E.H.レネバーグおよびE.レネバーグ E.H. and E. LENNEBERG 編『言語発達の基礎』*Foundations of Language Development*, New York, Unesco and Academic Press Inc., 1975 所収のファーガソン C.A. FERGUSON およびガーニカ O.K. GARNICA の論文「音韻発達の理論」Theories of Phonological Development, ブルーナー J.S. BRUNER「言行為の個体発生」The Ontogenesis of Speech Acts（『幼児言語ジャーナル』*Journal of Child Language* 誌，1975年，第2号，pp.1-19），イングラム D. INGRAM「幼児における音韻規則」Phonological Rules in Young Children（『幼児言語ジャーナル』誌，1974年，第1号，pp.49-64）の以上3篇を参照．

のはこの点である．このようにして，まず抑揚の線形 ligne mélodique が獲得されると，今度はそれが言表（エノンセ）に含まれる一定の限度を理解することにつながるのであるが，子どもはこの初歩的発見をもとにして，子音＋母音 $\widehat{CV}$，母音＋子音 $\widehat{VC}$，子音＋母音＋子音 $\widehat{CVC}$ などの音節から出発して，言表の分節要素を認識しこれを再生産しようと試みながら，やがて音節の構成要素そのもの，すなわち子音と母音を区別できるようになるというのである．

また，スタンプの理論――自然音韻論 théorie phonologique naturelle――は，比較しうるいくつかの発展段階があることを認めながらも，やはりモスコヴィッツの上記の理論とは異なっている．というのは，この理論が出発点において生成音韻論の諸傾向と一致するところがあるが，音韻上の発達過程に関しては，生得的な一種の普遍的体系を第一原理として仮定するからである（すなわち無制限かつ無秩序な法則）．

ここでワタソンの学説に言及しなければ，これら理論家たちの一覧は完全なものにならないであろう．ワタソンが最近発表した理論の指導的理念は，伝統的なファース流の韻律分析から直接に演繹されるものである．その理論によれば，幼児はまず，つぎつぎに調音される分節の支えとなるさまざまな規則的抑揚形態 formes mélodiques régulières を感知することができるが，個々の分節に含まれるより下位の変形部分 variantes mineures を聞き取ることはできないのである．子どもにとって音の一単位のように知覚される言表においては，子どもはまずいくつかの音素的特徴を把握するが，それらの音素的特徴がもつ辞列関係 relations séquentielles を意識しているとはかぎらない．同様に，子どもはあるひとつの単語に鼻音の要素を感知することはできても，その単語の一定の場所に鼻音の位置を正確に特定化することはできないのである．結局，子どもにおいては，大人の数多い発音形態の中に何度となくあらわれる特徴が独特のまとまりをなしてでき上がった一種の図式 schéma――ないしは骨格 squelette――というようなものを識別してゆく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb